

映画祭の旅

202111

「Films never forget.
Humans will forget,
but films remember forever.」

人間は忘れる...
けれどもフィルムは決して忘れない。

映画『いまはむかし』の中で私が思わず
呟いている“名言”をオランダ・アムステルダム
国際ドキュメンタリー映画祭の上映後の
スピーチで、英語で語りかけた...。ヘボカ
ントクの下手くそな英語にもかかわらず、
オランダのお客さんの心に響いたようだ。

アムステルダム国際ドキュメンタリー映
画祭は世界最大規模のドキュメンタリー映
画祭で、今年は220本の作品が上映された。
日本からは我が『いまはむかし』がノミ
ネート、三回の上映とトークに立ち会い、
確かな手応えを受け取ることが出来た。

いつものように「誰も来なかったら、ど
うしよう...」という不安でいっぱいだった
私の弱気を吹き飛ばすように、お客さまは
ぞくぞく詰めかけ、三回目の上映は二日前
にソールドアウトだった。上映後の反応も
凄かった。トークの後も、拍手が鳴り止ま
ないようだった。私の作品に対して特に、
というよりも、創り手に寄せる敬意の在り
方が、日本よりも強いのかもかもしれない。

『いまはむかし』はオランダのフィルム
アーカイブが80年近くにわたって、父・伊
勢長之助たちがジャワで製作したプロパガ
ンダ映画を保存・管理し続けてくれたこと
で成立した映画だ。

何故、ジャワ（今のインドネシア）で製
作した父たちの映画が、オランダに在った
かと言えば、当時ジャワはオランダの植民
地で、そこを日本が3年半にわたり占領・支
配し、1945年終戦時に戦勝国であるオラン
ダが130本余りのプロパガンダ映画を接收し
た、という歴史があったからだ。それにし
ても、言わば敵国のフィルムを長きにわ
たってしっかり管理してくれたことに、

感謝しないわけにはいかない。そのことを
スピーチで真っ先に伝えた。

今回の上映で今更ながら自覚したのは、
『いまはむかし』はフィルムが記録し続け
た事実を伊勢家三代（長之助、真一、朋矢、
佳世）にわたって物語った稀有な映画であ
る...といういことだ。戦時中、80年近く前
に父たちが創ったプロパガンダ映画であり、
戦後間もなく73年程前に父がプロパガンダ
映画を創っていたスタッフと共に製作した
『世紀の判決-ニュース特報・東京裁判』の
二本の遺されたフィルムがあってはじめて
成立したドキュメンタリーである。

戦争を進めるためのジャワでのプロパガ
ンダ映画と、戦争を批判する極東軍事裁判
の記録、相反する内容の二作の記録映画を
共に手がけた、父・伊勢長之助の存在を通
して、戦争のことを考える。

他人事ではなく、自分事として、戦争の
ことを映像化する。

父をいとおしむ気持ちを込めながら、あ
の戦争の時代の「真実」を描くドキュメン
タリーは可能だろうか...

戦争の歴史を繰り返し体験してきたオラ
ンダをはじめヨーロッパの人々にとって、
戦争は「いま」の課題そのものなのだと
思った。

「Now is the Past」 (いまはむかし)
... The Past is Now (むかしはいま)

海外での反響はもちろん嬉しいが、この
映画は今の日本でこそ、日本人の一人ひと
りに届けなければならない映画であることを
痛感した映画祭の旅だった。

ぜひ、映画を観てほしい。
ぜひ、映画を上映してほしい。

伊勢 真一